馬誌

雜話部

六十

武備兵法

和書門
類 號 一七三九五
函 一三〇
架 四
冊 六二

内閣文庫
和書
類 號 一七三九五
冊 六二
函 一五四
架 二一

内閣文庫
番號 和 17395
冊數 62 (61)
函號 154 455

国立公文書館 National Archives of Japan

馬誌巻之六十目録

雜話部

日本政府圖書

淺草文庫

馬誌巻之六十

雑話部

一 權現様仰られしハ天下の主にても勵み勤むへき藝に二つあり馬と水是なり世に二つハ名代のならぬものなりあきなひに二つあり馬と米これなり米ハ國の通用すへきため馬ハたゞ飼殺すへき道理なき故なり是を重ねての夜話に将軍へ申へしと

御諚あり其後御咄にかくの如く御意候よ
しか上ハヘハ御感悦ハし馬術水練とも
たえす御稽古遊ハし候と高山様御物語の
よし　藤堂文書

一　権現様御年よらせられ候ては猶更の事
御年若ニ御座遊されし節より歩行にて
も御馬のありき弟る如くの所にてハ御馬
より下りさせられ御歩行被遊れ候とあり
或ときに御近習衆へ仰聞られ候ハ我等の道

あしき所にて馬よりおるるハ大坪流極意の
一傳あり惣して歩行にても危きとおもふ
所にて馬にハ乗ぬものなりされハ又其身
大身にて乗替の馬をも牽せへきハ格別
只一疋馬を秘蔵ありくに小身侍抔ハ随分
と馬の足をかばひたるかよきなり馬に乗
れハ乗事とちかひ心得少しもいたむる
心なく馬の足をも乗損し或ハ馬に秘す
して叶ハすとある所にのそみて乗る事

もならぬやうに足あらて散らのるなり
能心得候へと仰られ候となり　駿河土産

一権現様御馬預りの諏訪部に上意にて馬役人ハ主人の乗料を乗込候にハ心得あるへき事なり主人の鞍かまへ手綱の拘へやう万事主人の乗形を見考へ其ごとく乗込然るへき事とありと大澤右近物語なり　大澤右近物語　前橋舊藏聞書

一駿府にて古馬を夏。阿部川にて冷し候に家康公上意には向の川岸にて冷まるへきありその日ハかやうにお引渡りのある川ハ向へ引候て参り冷し候へハ馬自然と川を渡すことを心得候ものなり　前橋舊藏聞書　山鹿物語

一享保年中犬追物再興あるへしと仰ありしゆ是ハ笠懸に熟したる者のなかりてハありかたしとて近習の徒を集めまつ笠懸の式を調練せしめらるゝあまたたびありさて笠懸に用ゆる馬乗出しにハその法に協

へとも中より末ハ駈足ニなりて法の如く進退
し給ひしとあれハ
吉宗公にも自から御工風ありて御一段之秘術
三右衛門盛安に御指南ありしより其後ハ馬もよく
其法をまなひ得たりとかいへり　享保優録

一　瑞龍院様ハ細野新次郎一雲か御指南中八條
流の馬を御修行ありて能召せられしなり
初て江戸御下向ハ寛永十年癸酉四月廿八日
御発足なり成瀬隼人正一岳御供せらる大井川
折節水深かりしかは何れも御駕籠にて御越
なさるへしと申きこしに隼人正いやしくも大将たるも
のか幼少なりとて是ほとの川を乗こさぬ
といふ事やあるへきと渡させ給へ先陣仕らん
と申入渡されしかは瑞龍院様御年九つ
にありしかさらはとて御打入て御渡しありしに
少しも御危けもなく御越ありし隼人正ハ
向ひの岸へ先あかり下り立待請まいらせて
御馬の御衡に取付御出かし成されなりとか

もはへす声をあけ泣ましよし此ときの
一岳の心底思ひやりてさく涙をとめ難し
一説に此節年八十四才先達てなり御供にて
いおうりしょりいは誤なりは老手の後も此
事ハ度々御吐ありて爺ヶ大に泣し今に
忘まぬとは意候りしよし　昔咄

一侍小路を掃部殿御通り成されにハ小身なる
侍屋敷の門前より家の内を御見入成されにハ
所に前掛したる女房手桶に水を持て馬
船に入て飼ひを御覧して家主女ヶ向て参り
ひへとて使をはやりひ處女房御返事に面目
なくひへとも小身者の事にてひへハ馬養ふ男
居合せ申さすよつて馬に水かひ申しひと
申ひへハ事々しく御誉成され何やらん下
されひよし　聞見集

一細川越中守重賢一とを頒内柳水といふ所
より出らる馬をとやうそへ々名にまひて様に
迄し給ひ余藥にも宰せらまでし川を渡

す所にて御騎遊ひせしかも馬役口取数多
有せしかて兎角にしけきものなりける君御覧
し給ひ初に召てとりあつかはせ給ひ永く御辭みある
ものに其変のきは〻とて御自から口とらせ
給へはすかしとりなたり斯る業まていつ
慣させ給ひけるにやと人〻みな驚きけり

勢免天語草

一 青山大膳亮 稗 紫鹿毛にて甚御寵愛なさ
れし御秘蔵の御馬是あり上使御馬を辻治五平

御馬方役人 遠乗に出る時に日比谷御門外御堀 甲府殿御屋敷の脇今御用屋敷あり へ乗入たり早く御屋敷 数寄屋橋御門の内御屋敷 へ注進
ありしかは治五平も御機嫌の程恐入つ〻差上し
とありしを何分御膳めし上られ御箸を下
に置せられ治五平か怪我はせぬかとの御尋に
て御馬の事は仰せられ〻すとも後御厩へ入せら
れし御杖にて御馬を御打擲はされ已に傾城あり
形もかやうに餓とても甚御氣色あしく治五平
も早速怪我はせぬかと何よりあきれてありしと御意

成されて下されしかハ悠五平肝よ感しあり
難く存し候こゝまても此事か咄出きしとなり

青大録

一

稲葉丹後守正勝の秘蔵せられし馬の小岡
隅の口ゆてこゝみて曲を出しけるか是を志さ
んとて甚須天下み名を以なる馬乗功者なる
秘術を盡しけれとも志得す田邊権太夫と
云家司心付て光悦に問けるに答しハ筆道必
馬術に熟せるへきにハ何かねと乗人に心あるあり
へし其人を召よとて廐の別当を呼出しけれ
けるハ光悦ハ馬の乗様未練にハ但お書すかいろ
は能筆法をおうる様あり貴方丸きの候字
を書て見られよと望しかた馬師も辞するに
及はす丸のゝ字を幾つも書ける光悦側より見
ありゝゝ字形筆法まを取て敷へ是ゆて角
の口を乗りされよ此のゝ字の筆法元より斯の
如くにせんとて書にハ何かす只筆先のあたる
所より筆も志かす吾も知らすて自然に丸く

まけて行所迄またに力を残して筆勢十分
に力を入る所とあるなと申けるは馬師得心し
ける此の字法筆意を見て角の口を取けるに果
して癖を出さずして元の如く成けり又鷹の
とりかふみの爪を拳の上にてひさと落しける
お学ぶりをも光悦に聞けるに下たる爪を揃も
下の方へ引ける程にひらきて爪を上ける故毎度
爪を上る心に成しかた程なく拳に居座りける
馬も鷹も心を以て教る道なれハ光悦が筆意の
心持にて座すへしと思しと田辺の談なり　明良洪範

一 昔ハ武士皆土着して或ハ牧馬又ハ厩子にて
も尻に任せ乗取り己か足の代りとする故朝
夕に乗こなし悪所巖石藪木立の嫌なく乗
走らしたるとなり一の谷合戦に平山武者所
季重か鹿の通ふ路ハ馬場なりと言しとなるにて
遠乗を想やるへし今の騎射の具に用ふる行
縢といふハ昔の武士の猟に出て猪鹿を逐廻
し藪とも崖ともいハせす乗下するに足を損す

まじき要具なり　武學拾粋

一 用前にて胸繊切れたる時ハ障泥の紐など以て両方より結ひ面繊切るゝまでたとへ輪の所へ面繊の総の所にてかゝむ尻繊きれなバ蹴あけにて括るひおよ金折れなバ弁みてもさす力革切れなバ餘の穴に掛直すべし無ときハ切付と肌付の間の小口へ掛けて挟む短くハあるとものとして試みて兼て工夫あるべく銜の鑣切れなバ手綱を取寄て口へ掛たさむなれ皆急事に備ふ古人の話しあり　騎士用本

一 長旅にハ趣き終に沓すりをあてさするならハ兼て猪の油を持て沓をおへき前に此油を馬の小うでに能ぬり付て沓をおへし毎朝塗てひつするに於てハ沓すり出来ることよ事なし然れとも此油を馬ねぶることなきやうにすへし魂魄を眛ますものなり　要馬秘極集

一 銜ハ勿論の事鞍にハ鐙障泥ともに常に
仕付置急の時ハ其まゝ馬ニ打掛腹帯する
迄にすへし 武道勇術集

一 井伊直孝代よりハ馬に鞍覆といふもの是
なく直絲鞍あり沓ハ鐙に結付て沓箱ハ
なし 武邊雑談

一 馬上にてハ傘を左にてさすへし目とをり
に柄を持へきなり 馬具寸法記

一 馬を途中にて取放し俄かに衘なきときハ

細引を真中に取て両方の手に持両方
ともに輪にして亦左を打返し右方の
輪の中へ入打違へ纏とかうかけにおして
両のむし手縄を用ゆへきなり 武道勇術集

一 八方柱といふハ馬の放れたるときする
なり何方へもゆかすくるくるとして居るよ
しなり地の八方に賊の字を楊枝にても
書跡ハ真中に打但し書ハ楊枝にてうち
直に其所に指込置なりさて臼を倒にして

一其所に伏置あり 軍用心得之記

一口取の腰にハ鼻捻をさすへし用立事多くあり 騎士用本

一夜道を行とき或ハ月毛何毛も見知よき馬のあとを乗るへしみぞ亦かけ道なと踏落すを見ハ我るの用心をすへし 竹中百箇條

一雪中なとに馬乗ときハ前輪を痛ほとにまを以て打へしさなき時ハ手をくらかさるものなり 武鑑輯畧

一高野落しといふ事ハ或とき落し見たるに彼山ハ十八間なそくの山なり難なく乗下したまふも左の臂を餘ほとすりむかしたり

一血留にハ虫にその馬糞を揩付しなり心得のため是も書載せをくなり 義覺覺書

一馬に咬されたる者ハ其熱きさるより火にて焼か如し甚いきれ苦むものなり是を治するにハ升の角より水を呑しむへし忽ち熱去て痛み軽くなるなりさそすへり覚

を搗たゝらゝし煎し呑へし疵には栗
子を咬摧き付てよし　安齋漫筆

一 古ハ士も馬醫爪髪まて心掛たると聞なり
今ハ下賤の所作と心得るハ誤りなるへし
騎士用本

一 馬に息をきらせまてハ詰馬をなきしむる
事も偏に乗人の心掛愚なる故なり両便を
出さんとする折から馬をとゞめすして追
たて乗ゆへ息詰りて死するなり能々心を
付へきなりされハ尿をつく鞍の肉ハ
沈みて脊合を伸るやうにして立留るなり
又糞を出す鞍の肉ハ後より腰根をあく
るやうにして氣味合重し此ときハ馬を留て
その便を通しさせしむへし　馬術要覧

一 馬のうち尾を遣ふといふハ走るとき
尾を引こみて内股をすき馬のことなり　岡本記 下同

一 馬の尾波をすといへるハ馬を誉る言葉
なり馬ハ尾の多くて走るとき尾の上下へ

あかりさゝるゝ浪の打たるやうなるを譬へ
てい事あり

一 馬の尾さゝらをすりてと云る事ハ馬の尾の多かるに足の揃ひたるをよき乗手ゝ拍子を違せて留たる時ゐるのうしろをすゐるとき尾と尾とすり合よゝさゝらをする如くなるとたとへしなりこれハ当たるときの馬をも乗手をも誉たるなり

一 馬の尾の角を取をハめんを取とやへし苦しからさるよしあり

一 さかりれハ花また紅葉なとの盛りにハ鞭をさゝすハ何きも心ハもし木にあまりて花又紅葉の散てハその氣色をいあり是ハ庭乗の心得あり

一 馬ハ乗下りといへしおりのりといふ間有あり又むちハ一筋手綱腹帯ハ一具障泥鞦ハ一掛鐙ハ一掛鞍ハ一口沓ハ一足切付ハ一口鞍覆ハ一つ行縢ハ一具といふ

一 馬の印ハ表のかねとハ左の肩をさし右の肩をハうらのかね又うちかねともいふなり又本印といふ事ハ馬の左の方なり是をほんかねとも表か祢ともいふなり努こもとかねと詞にいふべからす字ハほんとももとゝも訓とも斯の如く人の言ならハしたる所を記し分候なり 岡本記

一 馬をよそへ出し候状に毛付印なとの事ハ常の如く書へし或ハおろしかね。彦間田鎖。(ひこま。たくさり。)須弥盥(すみだらい)なとあるをもそへ状に書へし先本印を書て同しく下印(おろしかね)を書へし彦間。田鏁。須弥盥ハ三箇所の牧の名なり須弥足井。多久左里とも書なり 武器考證

一 彦間。田鏁。須弥盥との異名の事ハ馬のたちなり一段と子細ある馬に候間内状に此等ハ書載候事なり

貞丈云くたちとハそたちの略語なり
[illegible]云へとも彦間たちとよふハ彦間より出し牧

にて育ちたるをいへ右三箇所より良馬多く出しあり兼良公の御作の鵜鷺物語に乗たる馬ハ奥の田鏁とあり又同し御作の尺素往来にも多久佐里之本牧両三疋ひとあり又須弥足井邉並に肢爪地拘所替于馬ひとあり又大輪違者。彦尚立。庵下一方者御所の牧にひとあり其比ハ此三箇所の牧より出る馬を尊びまり又たちといふるハ、の三箇所のミにも限

らすぬりの乀立あといふ盛衰記あとにも見えたり詞に随て假に立の字。館の字を付たるあり本字ハ産の字ある乀し俗語にあのたち此たちといふハ馬より出たる詞あり

一 猿を馬の守りとて厩ふ掛るハ壒嚢抄にも見えて猿をハ山父と稱し馬をハ山子といへる父子の義を以てまもりとするか但し馬櫪神とて厩神あり其形像を圖する

には両足の下に猿と鶺鴒とを踏せて二手に劔を持れたり宋朝には是を馬の守とす此神の踏めるものの有さま猿なりを用るとも以て　武器考證

一　登壇必究にも以て書には獼猴（さる）を養へは馬の疥癬を去悪を辟るといへり　射書類聚國字解

一　後醍醐帝京都へ還幸のため正慶二年閏二月隱州を御出立ありて同き廿六日汐汰浦江積とかいふ所に御着ありてそれより陸へ御上

里ありける所に栗毛なる馬に鞍置たるを引て通る者なり金吾取て乗る此馬に召れたりけれとも何方へとも思召分たる事もなかりけるを冨士名三郎か申けるは當國の守護近江孫三郎高貞は某か一族にて候是を御頼みあるへく候と申けれは實にもとて御馬を其方へ向て寄せ給ひける程に此御馬前へは行すして頻に跡へそ歸りける此事不思議なりとて

馬に任せよと勅定ある程に此馬本の船津へ繞りて戻りけり 参考太平記下同

一 菊池入道櫛田の宮の前を打通けるとき軍の凶をや示されけん又乗打にしけるを御咎ありけん菊池か乗たる馬俄にすくみて一足も前へ進まず入道大に腹を立て如何なる神にてもをはせよ寂阿か戦場へ向はんずる道にて騎打を咎め給ふへきやうやある其儀ならは矢一つ進らせん迚て御覧せよとて上差の鏑を抜出し神殿の扉を二矢まてそ射たりける矢を放つと均く馬のすくみ直りにけるされはこそとよあさ笑ひて則ち打通りける其後社壇を見けれは二丈はかりある大蛇菊池か鏑に中て死たりけるとそ

一 馬之事。三町分限迄者。鞍皆具如形仕合可所持。従是分限者。可相嗜儀勿論也。三町以下之者茂於嗜者。可加褒美事。長曾我部元親百箇條下同

一國中之馬。他國へ出賣買。一切停止。若押而
出候者。其馬可召上。其上堺目番。堅可相留
事。
一馬の賣買ハ天保十三壬寅年五月相觸置
候處近來馬喰馬其外とも賣買甚た
高價ニ相成候内ニも良馬ハ稀ニ候処諸家
買入の節過分の價を以て賣渡し候者是
あるやに候譬へハ良馬に候共相當の價を
以て取引致すへく候乘合等よろしく相勝
れ候馬ニても代金貳十五兩其上の良馬に
ても金三十兩を限り右より決して高直に賣
買致すましく候其餘ハ右に准し馬振等の
樣子に隨ひ是又相當の直段にて賣買致す
へく候全く貪利に拘り良馬を隱し置
或ハ諸家買入の節賄賂の儀も是ありいては
以の外の事に候條以後右樣不正の儀ハ是
なきやう致すへく候今度右定直段の外
少しも餘分の價を以て賣買致し候ハゝ

其外如何しく贈物等これある趣相聞ゆるに於てハ賣主ハ勿論買取中ニ面々も越度たるへく條心得違ひ是なきやう致すへく候

國字分類雑記下同

一 馬の賣買ハ弘化三丙午年十月相觸置候ところ近来馬喰馬其外とも賣買甚〻高直に相成候につき去る寅年相觸候趣も是ありし処諸國牧場にて駒賣渡し方高價のよしにて自然賣買直段に相響き候やにお聞え候間諸國牧方にをいて駒賣渡し方成へく丈引下け不相當の價を以て賣捌かさるやう致すへく候

一 世に三人の馬夫あり一人の馬夫がいへるハ我千里を走る馬を持なからハさこそ駄賃を取てよきもうけあらんよほしさよといふ又一人のいへるハ尤千里の馬ハ不しけれとも一日に粟一石を喰ふとあれハまのよからん事ハさそ並ぬ当座の飼草悲しけれとも

我等ハ望ましかりすといへ又今一人の馬夫のいへるハ二人ともに果なき事を願へり今時ハ千里の馬もあるまし縦ひ馬ありとても我等如きの賤者の持事ハなり難かるへし其上千里の馬ハ走る事の勝れて早き事なれと我等ヵ漸く一日に十二里や十三里なと歩む足にてハ中〻其馬ハ追よる事能ハし縦ハ千里の馬持ても何の益なしたゝ持合たる馬こそ大切なれめと語れり誠に理に達して道ある事なり 馬術要覧

武馬必用

一或人のいへるハ馬を乗盛りといふハ四十より六十までの内なるらん三十まてハ人ことに血氣ハさかんなる故へ私の思ひにひかれて大概無理を乗ること多し四十になりぬれハ已まて血氣おさまる故へ私なく本心明ヵにして當然の趣きにしたかひ乗ゆへ馬と和合して毫末の違ひなし 又六十にあま

までは心。花の位にいたるといへども躰。不順に
してかなはずといへり　馬術要覧

一 或乗人のいへるは老ては馬ことに早きと覚
るものなり然れども馬も早きにあらず

一 昔とかはり頭重くなり足遅くして目かすみ息切るゆへ遅き馬をも一際早き
と覚ゆると語けり　武馬必用　馬術要覧

一 唐には牛を一頭といふ日本の詞に譯せて
湯桶文章にして牛一牽といふべきか馬
をも一匹といふいかさまは馬の眼には絹一匹
長(たけ)の間をも見るなり字注にいはく一匹は四
丈なり馬の光景一匹の長きありと畧中絹
を二匹といふいかさまは一疋は二きだけ也
夫婦二人の衣裳とあるゆへに一匹といふなり
夫婦二人あはすることをも一疋の夫婦といふ
なり論語に匹夫匹婦といふ是なり匹は
配なり物を一對といふが如きなり疋の字
同じきなり犬をも一疋二疋といふいかさまは

犬追物のとき河原との輪の内より犬を
はなせて騎馬二矢犬を射るなり二騎三騎
追組て射といへとも本になる矢ハたゞ一つ也
馬一足に犬一なる由へに犬を一足といふなり
世俗の詞みだりにして常の犬をも一足
二足といひあまつさへ鹿兎狸狐猫鼠小虫に
至るまていひ習ハしたり料足を十疋二十疋
といへいふさまハ追物のとき河原なる犬を百疋
となしては一貫文なる五十疋となして五百文

となり犬一足ハ十銭にあたるゆへに十銭を
一足といひ百文を十足といへり是犬追物より
出たる詞なり 奇異雑談

一 馬を乗にかくを入るといふ其かくの字ハ
角といふ字なり鐙のふちの四角なる所
なり夫にて馬の胴をおすゆへかくといふ
なりされ古へハかくを入るといひしを今ハ
かくをあてるかくをくれるなどいふ人
あり雲霞集に足の大指をそりて鐙

のかくを踏へしとありかくとハ鐙のふち
なりふむ所なり一説にかくハ脚の字なり
といへとも用ゆへからす角の字を用ふ
へし　貞丈雑記

国立公文書館
National Archives of Japan